

## ニュージーランドにおける

# 就学前教育の歴史ならびに現状（七）

松川由紀子

### (2) 就学前教育プログラム

#### ①概観

現代のニュージーランドの就学前教育プログラムは、一般に、自由遊び・自由選択活動プログラムが定着しているといわれている。子どもたちひとりひとりの発達、個性が最も大切に考えられていて、自発的な遊び、活動の重要性が広く認識されているのである。フリーキンダールテンとプレイセンターでは、子ども中心の自由遊びプログラムが最も活発に展開されていて、多様性に富んだ遊び環境が豊かに整えられている。両者の間にはプロ

グラムの差はそれほどみられないが、どちらかと言えば、プレイセンターのほうがより自由遊びプログラムを強調しているようである。一方、保育センターやプレイグループのプログラムはさまざまで、特別に教育理論に基づいて特色をもった教育をしているところもわずかにあるが、内容的に不十分なプログラムのところもみられる。しかし、一般的には、自由遊びプログラムが採り入れられていると言ってよいだろう。

自由遊びプログラムは定着しているのであるが、批判がないわけではない。特に、家庭で英語が話されていないマオリの幼児にとっては、こうしたプログラムだけで

は十分に言語面、認識面の発達が助長されないのではないか、という批判が出されている<sup>(6)</sup>。実際に、多くのマオリの子は小学校入学時に知的発達面ですでに遅れがみられ、そのためにスタートの時点でつまずいてしまう傾向が顕著であった。それ故に、就学前教育においてこうした子どもたちには特別な言語教育プログラムが必要なのではないか、というのである。なお、これについては、後に第三節でふれてみたい。

では、次に、フリーキンダーガルテンならびにプレイセンターのプログラムについて具体的にみてみよう。

## ②フリーキンダーガルテンの教育プログラム

フリーキンダーガルテンは、子どもたちの社会的、情緒的、知的ならびに身体的発達を助長するために、幅広い活動が展開されるようにプログラムを用意している。プログラムは、特に規定によって定められているわけではないが、フリーキンダーガルテン連盟の発行した最近のパンフレットによれば、子どもたちの自発的な遊び、活動を重視して、探究的、創造的、空想的、建設的、操作的ならびに身体的な遊びや活動、さらに言語、文学、

音楽リズム面の活動が十分に展開できるように、室内外にさまざまな教材、設備を用意して、子どもたちがいつでも自由に遊びや活動を選択できるように計画されたものである<sup>(7)</sup>。具体的には、室内には、ブロック、描画、コラーージュ、粘土、パズル、ままごと、絵本、音楽などのコーナーがあり、室外には、砂、水、大工遊び、冒険遊び（大きな板やタイヤなどを使って手作りして製作された大型遊具による遊び）などのコーナーが準備されている。子どもたちはそれぞれの興味、関心に基づいて自発的に遊び、活動を選択する。教師は、子どもたちの遊びを見守ったり、援助したり、指導したりする。特に、言語面の発達を助長したり、初歩的な自然科学（動植物、自然現象、数など）に対する興味を育てるように注意して子どもたちに教育的な働きかけをしたりする。また、一般に、音楽リズム活動や絵本の読みきかせなどをセッションの最後に、ごくわずかな時間であるが、設定しているようである。そして、天気の良い日には、しばしば海岸や公園、野原などに遊びに出かけていく。

このように、自由遊び・自由選択活動プログラムは、子どもたちの自発的な遊び、活動と教師による指導的側

面とがバランスよく組み立てられているものである。言うまでもなく、単に自由な遊びが展開しているわけではない。現在のプログラムは広く関係者によって支持的に考えられていて、七七年にオーケランド地区でなされた調査によれば、フリーキンダーガルテンの大多数の教師が「自由遊びの活動は知的な発達、特に何からの技能あるいは言語能力の達成に向けられたものではなく、中産階層の子どもたちの要求に合致しても、社会的に恵まれない子どもたちの要求には適さない」という見解に反対している<sup>(88)</sup>。つまり、自由遊びプログラムは、知的な技能、言語面の発達にも適切で、社会的に恵まれた子どもと同様に恵まれない子どもにも適用されるものである。という教師たちの確信がみられるのである。また、この調査によれば、大多数の教師が、キンダーガルテンでは調和的な、全面的な発達が重要であると考えているのだが、やや個人的な、情緒的な発達と社会的な発達に重点を置いているようで、小学校への準備は第二であると答えている。

### ③ プレイセンターの教育プログラム

プレイセンターも、子どもたちの調和的な発達を助長するために、豊かな遊びのプログラムを用意している。プレイセンター運動は、遊びは子どもたちの最高の教育者であるという信念に基づいてなされていて、活発な遊びが展開されていくことに最大の価値を置いている。そして、両親が子どもの遊びの意味を理解し、遊びに参加し、遊びのなかで子どもとともに学んでいくことが重視されている。そのために、活発な両親教育コースが展開されているのである。具体的な遊びのプログラムはフリーキンダーガルテンの場合とほとんど差はみられない。室内外にいろいろな遊びのコーナーが用意され、材料や設備が整えられ、いつでも子どもたちが好きな遊びや活動を選択することができるようになっていて、子どもたちの自発的な遊びをできる限り邪魔しないために、おやつ時間を設定しないで、おやつをコーナーを用意して子どもたちがそれぞれ好きな時に食べられるようにしているところもかなりみられるほどである。また、フリーキンダーガンデンのように音楽リズム活動や絵本の読みかせなどのために時間を設定することは、ふつう、なされていない。とにかく、子どもたちの自由な遊びをで

ざる限り尊重する姿勢が貫かれているのである。また、プレイセンターにおいても、単に自由な遊びが展開しているだけではなく、大人が絶えず子どもを全面的な発達を促進するように、遊びのなかを教育的な配慮を怠っていないことに注意していただきたい。ただ、プレイセンターのスタッフはキンダーガルテンの教師のように（ある程度全国共通の教師養成を受けた後で）雇用された者ではなく、両親たちのなかから運動内で（各協会の計画で）教育、養成された者であり、そうした両親の教育、養成の水準は、（地域で利用できる教育条件に差があることから）協会間による差異がみられるので、フリーキンダーガルテンのように一定の水準が保たれていれわけではないとはいえない。連合ならびに各協会が、出版物やパンフレット、フィルムなどを用いて、両親の教育、養成の水準を一定に保つように努力していることは、言うまでもないことである。

### (3) スタッフの養成

#### ① 概観

現在、フリーキンダーガルテンの教師の養成は六カ所の教育大学においてなされ、プレイセンターのスタッフの養成は各協会が責任をもって多様な養成プログラムを用意してなされている。保育センターのスタッフは、キンダーガルテンの教師資格やプレイセンターの指導者資格などをもつ者もいるが、何ら資格を有しない者もみられる。そのため、保育センター協会では現職コースを用意して、スタッフの養成に取り組んでいる。しかし、保育センターのスタッフ養成は、まだ十分に整備されたものではなく、今日の緊急な課題になっている。

では、次に、フリーキンダーガルテンの教師養成について具体的にみてみよう。そして、プレイセンターならびに保育センターのスタッフ養成についても若干ふれておきたい。

#### ② フリーキンダーガルテンの教師の養成

フリーキンダーガルテンの教師の養成は、運動の初期から熱心に取り組まれていて、すでに今世紀始めには二カ年の組織的な教師養成がなされていた。当時の養成科目は、オー克蘭ドの養成所の場合をみると、教育

法、心理学と児童研究、教育史、自然研究、フレーベルのギフツの使用法、フレーベルの『母の遊戯』と『人間の教育』、プログラムのたてかた、手工、音楽、描画などであった<sup>(9)</sup>。これらの科目の講義、実技が午後にあり、午前中はいつもキンダーガルテンに参加して実習していた。当時の教師養成においてはフレーベルの教育論が前面にでていたが、以後、次第により柔軟な姿勢になり、ある特定のものに傾斜していくことはみられなくなつた。現在の教師養成は、大筋は国によって基準が定められているが、具体的な科目編成はそれぞれの教育大学によつて特色があり、若干差異がみられる。一般的な特徴としては、学生ひとりひとりの人間的な発達、幼児に対する専門的な理解、そして、組織的な教育技術の習得、この三点が基本になっていて、ある程度、小学校教師養成コースに統合されている<sup>(10)</sup>。

ここでは、クライストチャーチ大学の場合を具体的にみてみたい<sup>(11)</sup>。

キンダーガルテン教師養成コースの学生は、一、二次を通じて、ほぼ毎日、午前中二時間、午後二時間の授業を受けていて、残りの時間をクラブ活動や自主的な勉

学などにあてている。教育課程は、「教育」、「言語」、「教科研究（選択科目）」、専門教育科目（カリキュラム研究）、教育実習に五区分されている。「教育」には「現代の教育」、「人間の発達と学習」、「教育の方法」、「多様な教育」、「家庭生活と子どもの発達」などの授業科目、「言語」には「教師のための言語」、「文学」などの授業科目が含まれ、そのほとんどは小学校教師養成コースと共通のものである。「教科研究」は、小学校教師養成コースの教科をひとつ選択して、二年間勉学して深めていくものである。キンダーガルテン教師養成コースの学生を対象にした専門教育科目には、美術工芸、音楽リズム、児童文学、「幼児のための科学」、「幼児のための数学」、「マオリ研究」ならびに「キンダーガルテン研究」といった授業科目が含まれ、実的なカリキュラム関係の勉学がなされる。「マオリ研究」は、（教師として必要な）マオリ文化に対する理解が目的とされ、この国の複数文化社会を反映して設けられているものである。そして、キンダーガルテン教育実習は、一年次に八週、二年次に十一週、計十九週なされている。こうして、キンダーガルテン教師養成コースの教育課程では、教育ならびに幼児教

育に関する原理的、理論的側面の勉強とともにキンダーガルテン教育に関する実際的な知識、技術の習得が重視されている。

これらのなかで、「家庭生活と子どもの発達」と「キンダーガルテン研究」は、キンダーガルテン教師養成コースの学生のために設けられた科目のなかでも、とりわけユニークなものである。「家庭生活と子どもの発達」は、学生がそれぞれある家庭を定期的に訪問して、子どもものしつけ、発達の様子を観察したり、家族の者と話し合ったりして、家庭における子育てを理解し、両親による家庭の子育てを（キンダーガルテンにおいて教師として）どのように援助していけばよいのか、について勉強することを目的にしている。「キンダーガルテン研究」は、キンダーガルテン教育に関する実際的な知識、技術の習得が目的とされている授業科目であり、教育実習を充実したものにするための基礎的な土台ともなっている。この科目の具体的な授業展開予定がシラバスに記されているが、わが国の教師養成問題を考えていくうえで貴重な示唆を与えてくれるように思われるので、次に紹介してみたい。

この「キンダーガルテン研究」の科目は、一、二年次ともに毎週二時間、それぞれ別個に開かれているものがあるが、これに密接に関連したものとして、スタッフならびに一、二年次生の全員が毎週木曜日の午前中（九時から十二時まで）に規則的にそれぞれ一定のキンダーガルテン（時にはプレイセンターや保育所など）に参加することになっている。「キンダーガルテン参加」の時間が設けられている。つまり、「キンダーガルテン研究」は「キンダーガルテン参加」と連絡して運営されている。

「キンダーガルテン研究」は、幼児期の教育に関する知識、とりわけキンダーガルテンの遊びのカリキュラムに対する理解ならびに基本的な教育技術の確立を目的に設けられている。学生は、観察記録の提出や課題図書への報告、そして、何個か出される諸課題の報告書の提出が求められる。（授業内外でなされる）討論やゼミに積極的に、主体的に参加することが要求されている。「キンダーガルテン研究」の年間授業計画を「キンダーガルテン参加」とあわせて表にしてみよう（表3）。

「キンダーガルテン研究」、「キンダーガルテン参加」ならびに教育実習は、地域のキンダーガルテンと密接に

表3 「キンダーガルテン研究」ならびに「キンダーガルテン参加」の年間授業計画  
 (一九八二年度 クライストチャーチ教育大学)

学年	
週	
26	「キンダーガルテン研究」
25	「キンダーガルテン研究」
24	「キンダーガルテン研究」
19	「キンダーガルテン研究」
18	「キンダーガルテン研究」
17	「キンダーガルテン研究」
14	「キンダーガルテン研究」
13	「キンダーガルテン研究」
12	「キンダーガルテン研究」
11	「キンダーガルテン研究」
10	「キンダーガルテン研究」
9	「キンダーガルテン研究」
8	「キンダーガルテン研究」
7	「キンダーガルテン研究」
6	「キンダーガルテン研究」
1	「キンダーガルテン研究」

第1、2、3、4週、オリエンテーションその他のため開講せず。  
 フィンガーペイント、粘土、砂、水遊びに関する講義。  
 個人指導ならびに討論。  
 フィルム「コラーージュならびにボックス」。  
 コラーージュ、大工、パズル遊びに関する講義。  
 祝日のため休講。  
 廃品遊びに関する講義、フィルム「廃品遊び場」。  
 身体活動に関する講義、フィルム「戸外遊び」。  
 描画活動に関する講義、フィルム「フィンガーペイント」「粘土遊  
 び」。  
 フィルム「創造遊び」「世界の発見」、討論。  
 第15、16週、五月休暇。  
 ままごと、ブロック遊びに関する講義。  
 フィルム「劇遊び」、討論。  
 フィルム「ブロック遊び」、討論。  
 第20、21、22、23週、教育実習。  
 遊びの役割に関する講義。  
 古典的な遊び理論に関する講義、フィルム「遊びの役割」。  
 現代の遊び理論に関する講義、フィルム「遊びのすべて」。

フィンガーペイント、粘土、砂、水遊びの観察、記  
 録の提出。  
 コラーージュ、大工、パズル遊びの観察、記録の提  
 出。  
 廃品遊び、身体活動の観察、記録の提出。  
 描画活動の観察、記録の提出。  
 ままごと、ブロック遊びの観察、記録の提出。  
 遊びの役割に関する観察。  
 遊び理論に関する観察。

		1									
7	6	44	43	42	41	40	39	34	33	32	27
<p>第1週、開講せず。 第2、3週、教育実習。 第4、5週、集中講義その他のため開講せず。 大人と子どもの接触に関する講義。 キンダーガルテンの新設に関する講義（協会メンバー）、大人の役</p>		<p>遊び理論ゼミの準備。 第28週、共通選択科目のため休講。 第29、30、31週、八月休暇、遊び理論ゼミの開催。 子どもの要求に関する講義。 病気の子どもの遊びに関する講義、フィルム「病院内の遊び」「入院中の子ども」。 子どもの要求に関するテスト。 第35、36、37、38週、教育実習。 幼児教育の目的ならびに価値に関する講義。ビデオ「キンダーガルテンにおける調理」。 おやつに関する討論、フィルム「安全な遊び」。 トイレならびに清潔面に関する討論。 幼児教育哲学に関する講義、幼児教育の目的ならびに価値に関する報告書の提出。 幼児教育プログラムに関する講義、フィルム「臆病な世界で成長する」。 フィルム「玩具の概観」、二年次に向けてのオリエンテーション。</p>	<p>遊び理論に関する報告書の提出。 市内の遊び場の見学。 教育実習予定先のキンダーガルテンの見学 教育実習の準備。 おやつに関する観察。 安全面に関する観察。 祝日のため休講。 トイレならびに清潔面に関する観察。 玩具箱の観察。 玩具館の見学。</p>								
<p>大人と子どもの接触に関する観察。 大人と子どもの接触に関する報告書の提出。</p>											



8	割に関する討論 順番待ち表ならびに入園許可に関する講義(協会メンバーあるいは 教育省助言者)。 大人の役割に関する講義ならびに討論	大人の役割に関する観察。
9	幼児教育機関の発達に関する講義 祝日のため休講。	プレイセンターの見学(第一回)。 プレイセンターの見学(第二回)。
10	幼児教育機関の発達に関する講義	プレイセンターの見学(第三回)。
11	祝日のため休講。	プレイセンターの見学(第四回)。
12	幼児教育機関の発達に関する講義ならびに討論。	
13	幼児教育機関の哲学と組織に関するゼミの準備(キンダーガルテン グループ)。	
14	同ゼミの準備(プレイセンターグループ)。 第15、16週、五月休暇、幼児教育機関ゼミの開催。	同ゼミの準備(保育所グループ)。
17	保育所ならびにプレイグループに関する講義、フィルム「保育所」。	保育所の見学(第一回)。
18	フィルム「キブツの保育所」、保育所に関する討論。	保育所の見学(第二回)。
19	モンテッソリに関する講義(モンテッソリ保育センター所長)	保育所の見学(第三回)。
24	第20、21、22、23週、教育実習。 著名な幼児教育者たちに関する講義。	いつものキンダーガルテンにて観察(課題なし)。
25	幼児教育者たちに関するゼミの準備。	
26	同ゼミの準備。	
27	同ゼミの準備。	
32	第28週、共通選択科目のため休講。 第29、30、31週、八月休暇、幼児教育者ゼミの開催。 管理・運営に関する討論。	同ゼミの準備。
33	健康・衛生に関する討論。	教育実習予定先のキンダーガルテンの見学。

過去のキンダーガルテンに関する討論。

第35、36週、特別プログラムのため休講。

第37、38週、教育実習誘導。

第39、40、41、42、43週、教育実習。

教育実習の準備。

(注 新学期は二月で、十二月・一月は夏季休暇)

結びついて展開されていて、学生が午前中にキンダーガルテンを助力していた、初期のフリーキンダーガルテン運動にみられた、教育実践と教師養成面との連結が現代的に変形されて引き継がれているものであるように思われる。今日、学生は何らキンダーガルテンの教育実践を助力するものではないが、教育実践現場と強いつながりをもって教師養成がなされている。フリーキンダーガルテン運動の歴史をふりかえりながら、今日の教師養成をみていく時、その基盤はわが国とは異なったものであることに気づくだろう。地域のキンダーガルテンと教師養成面との密接な連絡は大切なことであるが、ここにもられる方式を基盤の異なるわが国にそのまま移入することはあまり意味がなく、むしろ、その姿勢を検討して、そこから学びとることが重要であろう。

### ③ プレイセンターのスタッフの養成

プレイセンターのスタッフの養成は、各協会が責任をもって養成計画をたてているが、両親教育のプログラムと共通しているものもみられる<sup>(6)</sup>。一般的には、労働者教育協会や通信教育、総合大学公開部のコース、ならびに協会主催のセミナーコースなどで、子どもの発達、人間関係などに関する講義を受けたり、それぞれのプレイセンターで子どもの遊びの観察をして記録をとったり、ワークショップに参加したり、セッションで実践したりする。そして、養成プログラムのレベルによってペアレントヘルパー、助手、指導者、全国指導者の資格が得られるようになっていく。

### ④ 保育センターのスタッフの養成

保育センターのスタッフの養成の第一歩は、六九年の

王立健康協会の保育ワーカーの資格であった<sup>(8)</sup>。七一年の就学前教育探究委員会報告書は、この保育ワーカーの養成にはあまり注意を示さず、フリーキンダーガルテンやプレイセンターなどの既存の養成コースを利用して、何らかの資格を取得するように勧告した。八〇年に、保育センター協会は王立健康協会から保育ワーカーの資格を授与する責任を引き受けた。近年はA級の保育センターが増加しているとはいえ、何ら資格をもたないまま職についているスタッフがまだ多い故に、現職スタッフの養成コースがオークランド専門学校に設けられ、オークランド大学の幼児教育スタッフの協力によって運営されている。就業前の養成コースは、ウェリントンならびにクライストチャーチ専門学校に保育助手のコースがみられるだけである。教育省は、通信教育校に保育コースを設けたり、保育センター問題に取り組む助言者（パートタイムで四名）を任命したり、助言者や教育官によるワークショップを開いて研修の場を設けたりして、保育センターの質の向上を目ざしている。

なお、八三年十月より、政府は保育センターへの助成を本格的に開始した。有資格スタッフや受講中のスタッ

フのいる保育センターに助成金を交付し、養成面に三〇万ドルの助成を導入したのであった。今後、保育センターのスタッフの養成はさらに積極的に取り組まれていくものと思われる。

以上、スタッフの養成について、フリーキンダーガルテンの教師養成を中心にしてみてきた。それぞれ独自にスタッフの養成がなされているが、キンダーガルテン教師の養成数の減少、成人教育を利用したプレイセンターのスタッフの養成、保育センターのスタッフ養成の急務などについて考えてみると、養成上に共通する部分がありあってもよいのではなからうか、さらに、統一的な養成制度が望ましいのではないか、という思いを抱く。キンダーガルテンの教師養成は国立の教育大学においてなされているが、そのコースは、（便宜上はキンダーガルテン教師養成コースという名称が使用されているが、正式には）幼児教育コースとなっていて、誕生から七、八歳までの子どもたちの教育を対象としている<sup>(9)</sup>。すでに関係者によって統一的な幼児教育関係のスタッフの養成の必要性が望まれている。将来、どのような養成制度

になつて行くのか見守つて下さる。

(山口女子大学)

註

- ① Jane Ritchie; *Chance to be Equal*, Cape Catley, Queen Charlotte Sound, 1978, pp. 2-3. なお、著者はワイカト大学の心理学の上級講師。
- ② New Zealand Free Kindergarten Union; *Free Kindergarten and Your Child*, New Zealand Free Kindergarten Union, 1982.
- ③ June Kean; *The Task of the Kindergarten*, North Shore Teachers College, 1979, p. 76. なお、筆者はノースシモア教育大学の幼児教育の上級講師(当時)。
- ④ Betty Cosson; *A History of the Training of Kindergarten Teachers in Auckland 1908-1948*, Unpublished Dip. Ed. thesis, University of Auckland, 1970, pp. 6-7. なお、筆者はオータマンダのキンダーガルテン教師養成所の講師(当時)。
- ⑤ Department of Education; *Training for Teaching in Free Kindergartens*, Government Printer, 1982, p. 4.
- ⑥ 以下の記述は、クライストチャーチ教育大学の幼児教育の上級講師のハギット先生(A. M. Haggitt)からいただいた、一九八二年度の大学案内ならびに講義シラバスなどをもとに記している。
- ⑦ Somersel, op. cit., pp. 42-45. なお、具体的な養成プログラムの例が、クーパー氏によって本誌(第八十二巻第五号)に紹介されて

いるので、参照していただきたい。

- ⑧ June Kean; *Training for Early Childhood Care and Education in New Zealand: a Partnership*, in *Australian Journal of Early Childhood*, vol. 7(4), 1982, pp. 24-25.

⑨ なお、教育省の部門名称においても、キンダーガルテン教育部門はなく(より包括的な)幼児教育部門となっている。

